

[平成21年度普及に移す技術]

[技術名] イクヒカリの直播栽培技術

[要約] イクヒカリ直播栽培では、播種量乾籾 3.2kg/10a、苗立本数を 100 本/m<sup>2</sup>程度とする。収量・品質が安定する施肥量の基準は、速効性：緩効性：遅効性窒素の割合が 3:3:4 の新規開発肥料の基肥一括側条施肥体系では 9Nkg/10a、速効性肥料を用いた分肥体系では基肥（全層）4+中間 2+穂肥 4(2+2)Nkg/10a、計 10Nkg/10a である。

[キーワード] イクヒカリ、直播栽培、苗立本数、基肥一括施肥

[担当] 福井県農業試験場 作物・育種部 作物研究グループ

生産環境部 土壌・環境研究グループ

[連絡先] 0776-54-5100

電子メール t-minobe-wi@pref.fukui.lg.jp

[背景・ねらい]

食味が良く、新しい「福井ブランド」として生産拡大が期待されるイクヒカリはコシヒカリに比べ穂数が少ない、粒が大きい、倒伏に強い等の特性を持ち、その特性に応じた直播栽培技術が求められている。

そこで、収量・品質の安定したイクヒカリの直播栽培技術を開発する。

[技術の内容・特徴]

1 イクヒカリの直播栽培では、収量・品質の安定のため、目標とする苗立本数は 100 本/m<sup>2</sup>程度とする。(図 1)。このときの目標播種量は、乾籾 3.2kg/10a 程度（千籾重 27.6g、苗立率 85%）である。

2 イクヒカリ直播栽培に適した一括肥料の配合割合は、速効性窒素と IB 窒素 40 日溶出タイプ（緩効性窒素）、シグモイド型被覆尿素 100 日タイプ（遅効性窒素）を 3：3：4 である。この肥料では窒素成分は幼穂形成期までに約 60%、出穂期までに約 85%が溶出する（図 2）。

イクヒカリの直播栽培で収量・品質が安定する基肥一括側条施肥体系の施肥量の基準は、9Nkg/10a である（表 1）

3 速効性肥料を用いた分肥体系の施肥量の基準は、キヌヒカリと同程度の基肥(全層)4+中間(5L 期表層)2+穂肥(①幼穂長 2mm②10 日後、表層)4(2+2)Nkg/10a、計 10Nkg/10a である（図 1、図 3、図 4）。

[技術の活用面・留意点]

1 本試験は地力の比較的高い圃場での結果である。地力の低い圃場では、一括施肥または基肥を 1Nkg/10a 程度増肥を目安とする。

2 穂肥増肥は増収するもののタンパク質含量が増加するので、砂質土等で肥効が不足する場合を除き、行わない。

2 リン酸・カリは慣行量を施用する。

[普及計画]

普及目標：イクヒカリ直播栽培面積 430ha

普及対象：イクヒカリ直播栽培農業者

普及に向けた対応：成果発表会等

[具体的データ]

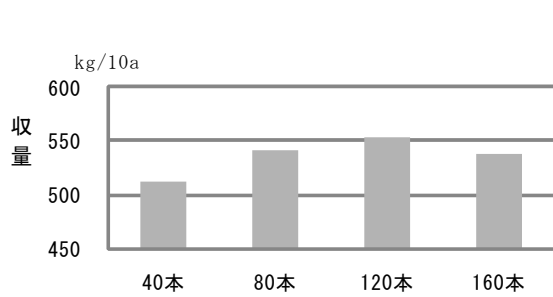


図1 イクヒカリ直播栽培における苗立数別収量

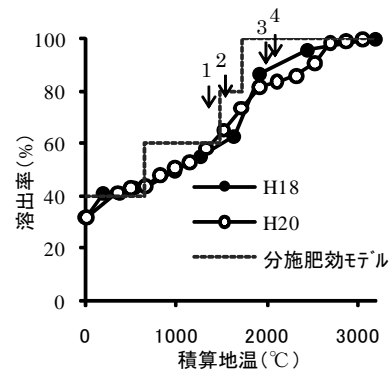


図2 施肥窒素溶出量

1:H20幼形期 2:H18幼形期 3:H20出穂期 4:H18出穂期  
 播種日 H18:5/1、H20:5/9 総窒素量:9kg/10a

表1 イクヒカリ直播栽培における基肥一括肥料側条施肥

年度	播種日 月/日	施肥窒素量 kg/10a	精玄米重 kg/10a	穂数 本/m <sup>2</sup>	総粒数 100粒/m <sup>2</sup>	良質粒割合 %
H18 <sup>*1</sup>	5/16	7.9	566	303	273	77.0
H19 <sup>*2</sup>	5/2	8.0	581	271	252	66.5
H20 <sup>*3</sup>	5/8	9.0	593	350	273	70.4
H20 <sup>*4</sup>	5/9	9.0	590	397	286	70.5

\* 1: 鯖江市川島、\* 2: 福井市朝宮、\* 3: 鯖江市中野、\* 4: 農試

外観品質:S社品質判定機RS-2000・ES-1000により測定、玄米タンパク含有率:S社成分分析機GS-2000により測定

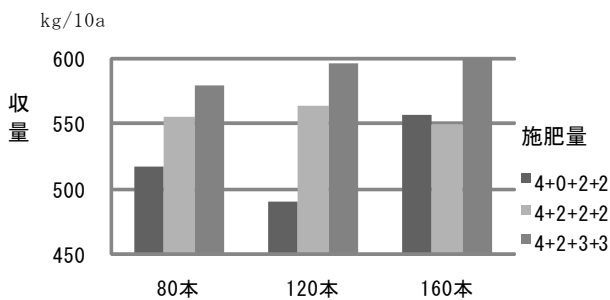


図3 イクヒカリ直播条播栽培における施肥量による収量変化

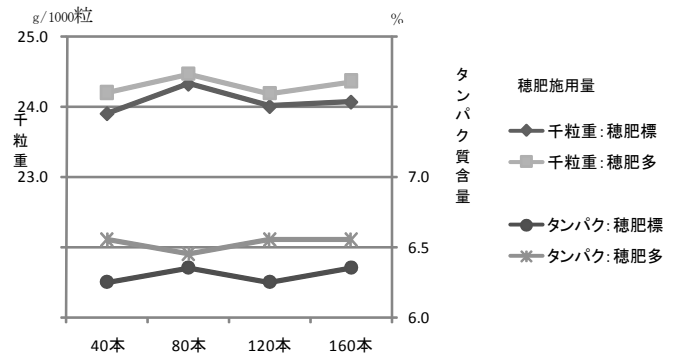


図4 イクヒカリ直播条播栽培における千粒重・玄米タンパク質含量

[その他]

研究課題名: イクヒカリの高位安定生産技術の確立

(2) 省力・低コスト栽培技術の確立

研究期間: 2006~2008年度

研究担当者: 見延敏幸、中嶋英裕、北倉芳忠、細川幸一、斉藤正志